

令和元年度

福井大学

地域貢献事業支援金

成果報告集



国立大学法人 福井大学

地域創生推進本部

Headquarters for Regional Revitalization

発達障害を抱えた子へのキャリア発達支援（楽集クラブ3・9・1）

事業責任者： 廣澤 愛子（教育・人文社会系部門・准教授）

代表学生： 八木 咲乃（特別支援教育サブコース・4年）

概 要	発達障害児へのキャリア発達支援について 楽集クラブ3・9・1は発達障害を抱えた子どもへのキャリア発達支援を行う活動であり、福井大学教育実践総合センター教育臨床部門が主催している。活動では、①発達障害のある子どもが、自己理解を深めると共に、社会性(主体性・他者理解・協働性)を身につけること、②発達の弱さを抱えた子どもを養育する保護者を支援し、保護者の育児負担感を軽減すること、③特別支援教育や生徒指導・教育相談に携わることを目指す学生が、教師になった後も活用できる、発達の・心理的課題を抱えた子どもへの専門的支援の在り方を身につけること、の3点を目的としている。本活動も丸9年を終え、成果が目に見えるようになった。具体的には、各子どもがそれぞれの進路を見出し、また学生も専門性の基礎を身につけて教育現場で教師として活躍している。今後も本活動を通して、地域貢献（発達障害のある子どもへの支援と教職志望学生の支援力育成）を続けていきたいと考えている。
関連キーワード	発達障害児へのキャリア発達支援、保護者支援、教職志望学生の支援力育成

事業の背景および目的

楽集クラブ3・9・1は、2011年4月に始まった事業であり、今年で丸9年となる。発達の弱さを抱えて社会適応に困難が生じている子どもに居場所を提供し、SSTをはじめとした様々な活動を通して、“キャリア発達支援”を行い、同時に、この活動に係わる学生が特別支援教育の専門性を身につけて、教職に携わることができるよう後方から支援することを目的とした療育活動である。

事業の内容および成果

【対象者及び対象地域】

福井市近郊に住む、発達障害のある子どもとその保護者

【活動内容】

活動内容は、以下の6点に集約される。1)一人一人の子どもの学習の進度に応じた、個別学習活動(→基礎学力を培う)、2)一人一人の子どもの自主性・創造性に委ねた自由活動(→主体性・自己決定力・自己肯定感を培う)、3)複数の子どもたちが協働して行う、集団活動(→自己主張と他者理解の両立、すなわち社会性を培う)、4)3)の活動を発展させた、遠方への体験学習や販売活動といった実践活動(→就労に直接つながる実践力を培う)、5)保護者への面談やアドバイス、さらに、医療機関や教育現場との連携、6)事前ミーティングと事後ミーティングを通して、特別支援教育志望学生が専門性に裏打ちされた係わりを習得

【活動日程及び活動回数】

第1週目を除く火曜日(16時30分～18時30分)の通常活動と、夏季・秋季・冬季に特別活動(半日～一日)を実施。1年間を通して24回の活動を行った。

【成果】

1)子どものキャリア発達の促進に繋がる基礎学力・自己理解及び他者理解・他者との協働性の育成、2)学生の教職専門性の獲得、3)保護者同士の支え合いを促す組織作り、の3点が成果として得られたが、2)については客観的なエビデンスはえられておらず、今後、研究として位置づけ精査していく予定である。

参考文献・添付資料および特記事項等

廣澤愛子・武澤友広・織田安沙美・鈴木静香・小越咲子(2019). 自閉スペクトラム症の児童と支援者の相互作用プロセス：社会性の育成を目的とした療育場面への参与観察分析から 発達心理学研究, vol30(2), 61-73.

事業名称:発達障害を抱えた子へのキャリア発達支援（楽集クラブ3・9・1）

事業責任者： 廣澤 愛子（教育・人文社会系部門・准教授） 代表学生： 八木 咲乃（特別支援教育サブコース・4年）

キーワード： 発達障害児へのキャリア発達支援、特別支援教育志望学生の支援力育成、保護者支援

活動の目的

小集団療育活動を通して、発達的な弱さを抱えた学齢期児童の社会性（自己理解・他者理解・協働性）を育成する

学生が実践を通して、特別支援教育や心理臨床の専門性に触れ、専門性の基礎を身につける

保護者への面談を通して、保護者の育児を後方から支援する

活動の内容

1回2時間の小集団療育活動を月3回、以下の内容で実施

- 1) 各子どもの進度に応じた、個別学習活動
- 2) 子どもの自主性・創造性に委ねた、自由遊び活動
- 3) 子どもたちによる協働活動
- 4) 共同活動を発展させた実践活動(→キャンプや販売活動)
- 5) 保護者への面談・アドバイス、医療機関や教育現場との連携
- 6) 支援活動及び事前・事後会議を通して、学生の専門性習得を後方から支援

事業の成果と課題

以下の2点が成果、1点が課題として、確認された

成果1)

子どものキャリア発達の促進に繋がる、基礎学力・自己理解・他者理解・協働性の育成

成果2)

保護者の育児負担感を減らすだけでなく、保護者同士の支え合いが可能となるような組織の成立

課題

学生の学びについて、客観的なエビデンスが得られておらず、今後研究として取り組むことが必要

親子の相互作用を促すことで養育者の発達を期待した 地域親子支援グループ（集まれAキッズ）の開催

事業責任者： 榊原信子（子どものこころの発達研究センター 学術研究員 臨床心理士
連合大学院 小児発達学研究科 博士課程3年）

概 要	<p>親子の相互作用がポジティブなかかわりになるよう働きかけ、養育者が育児を肯定的にとらえることを目指した「親子遊び教室（集まれAキッズ）」を、2017年10月～月一回開催してきた。本事業が終了した後も、町独自で「集まれAキッズ」の運営が継続できるよう、以下のことに取り組んでいった。</p> <p>①本事業を「保育カウンセラー配置事業」に位置づけ、子育て支援課保育師が養育者支援の視点で活動リーダーを担えるようプログラムの検討を重ね、松岡保健センターと子育て支援課の連携を強化していった。</p> <p>②「プログラム」は、子どもの行動を養育者が理解しやすいよう半構造化し、福井大学スタッフが養育者に対するロールモデル、コーチング、フィードバック等で支援する方法を町スタッフと共有していった。</p> <p>③本事業が、養育支援者の研修機能も担えるよう、町内幼稚園園長も交替で毎回参加し、児童発達支援等の福祉サービスを担う福祉保健課職員の参加も加わり、関係機関の連携を拡充していった。</p> <p>④本事業による「子育て支援ニーズ」の掘り起こしにより、「発達個別相談」事業（年2回）を本事業の前後の時間に配置し、心理士予算（年12回×2人分）の確保に至り、専門相談の機会の充実を図っていった。</p>
関連キーワード	半構造化親子遊び、養育者支援、支援者研修、他機関連携、子育て困難の援助希求

事業の背景および目的

子どものこころの発達研究センター発達支援研究部門では、2012年8月から永平寺町保健センター協力のもと、出生してから5歳までの乳幼児とその養育者の発達追跡研究「Aキッズ調査」を継続中である。本事業は、調査協力養育者への個別フィードバックと協力自治体(永平寺町)への成果還元を兼ね、半構造化された集団場面で、親子の相互作用がポジティブなものになるよう支援者が働きかける「プログラム」により、子どもの社会性発達を促し、養育者自身が育児を肯定的にとらえることを期待して、福井大学主導で始めたものである。本事業の目的は「Aキッズ調査」が終了する2021年3月までに、町が独自で本事業を運営し、子ども達が就学した後、子育て困難に遭遇した養育者が「自ら援助希求できる・援助希求しやすい地域」となることである。目標は、①主催する担当部署を決める、②現場に合わせた「プログラム」を検討する、③運営リーダー及び関係機関の人材を育成する、④子育てニーズを把握し、運営費を予算化することとした。

事業の内容および成果

1) 「集まれAキッズ」の開催（当日の事業運営計画：別添）

実施場所：永平寺町立松岡保健センター

開催予定日：毎週第4土曜日9時半～10時半(親子遊び) 11時半～(個別相談)

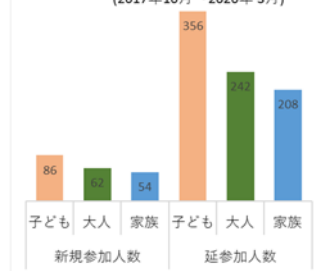
募集方法：1歳半・3歳児健診、5歳の歯科相談等の母子保健活動、及び幼稚園の生活などで、子どもの発達が気になる、養育者が子どものかかわりに困っていると感じられた際にチラシを配布し案内（別添）

スタッフ：《永平寺町》松岡保健センター保健師（1名）子育て支援課保育師（1名）福祉保健課保健師（1名）幼稚園園長（交替で1名）
《福井大学》派遣保育師（1名）、派遣心理士（3名）

参加状況：《右図参照（参加回数平均）2018年度2.6回 → 2019年度3.9回》

集まれAキッズ参加状況

(2017年10月～2020年3月)



2) 成果

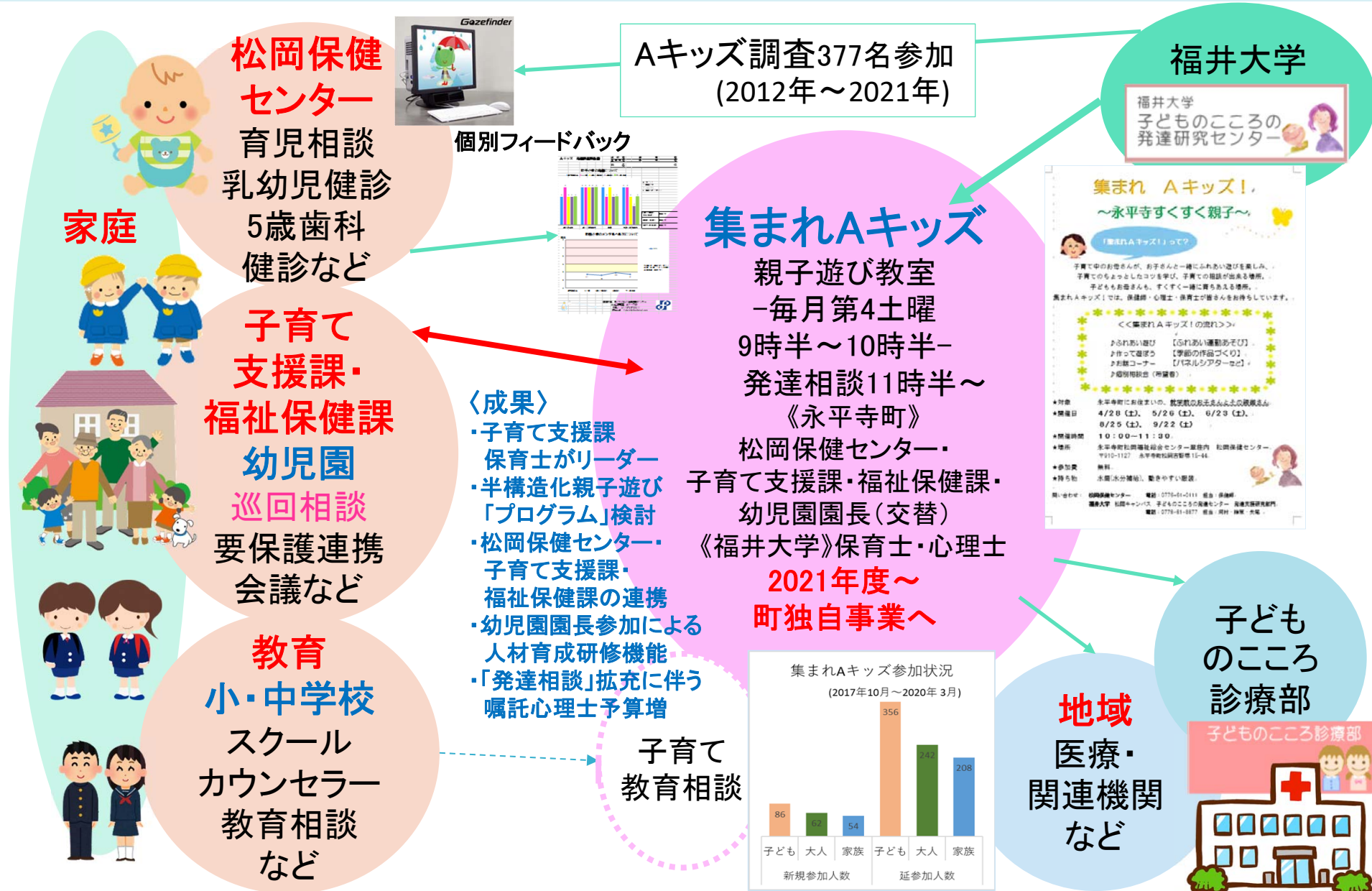
- ①松岡保健センターと子育て支援課が共催で担当することとなった。
 - ②半構造化した親子遊び「プログラム」を検討し、親の個別相談のニーズに合わせて、遊び場面の相談の他に「発達相談」の時間を「プログラム」後に増やし、回数も拡充した。
 - ③2019年6月～子育て支援課保育師が活動のリーダーの役割を担えるよう検討を重ね、町内の幼稚園（10園）園長も交替で参加し、今後は主任、担任保育師の研修の場となっていく予定である。
 - ④「発達相談」の回数が増えたことと合わせて、嘱託心理士2名分の町予算が拡充された。
- 3) 発達追跡研究「Aキッズ調査」に協力同意を得た377名の親子が、2022年には全員就学を迎えるため、社会性の発達や養育者自身の特性や養育認知などに関するアンケート調査を、引続き縦断的に実施していく。併せて、子どもが就学した後の「子育て相談」に関する現状把握、及び「集まれAキッズ」「発達相談」の認知度などについて追加アンケートを実施し、就学後に子育て困難に遭遇した養育者が「自ら援助希求できる・援助希求しやすい地域」を構築していくデータを回収、分析予定である。

参考文献・添付資料および特記事項等

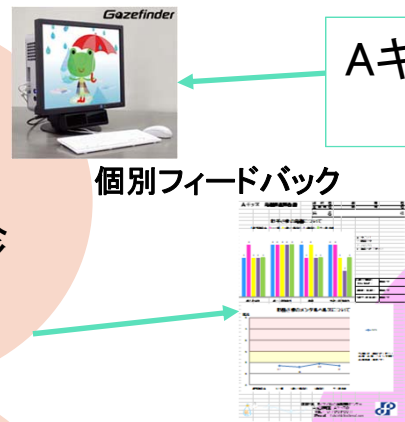
- 1.「集まれAキッズ」チラシ 2.当日の事業運営計画

事業名称:親子の相互作用を促し養育者の発達を期待した地域親子支援グループ(集まれAキッズ)の開催

事業責任者: 榎原信子(子どものこころの発達研究センター 学術研究員/連合大学院小児発達学研究科 博士課程3年)



Aキッズ調査377名参加 (2012年~2021年)

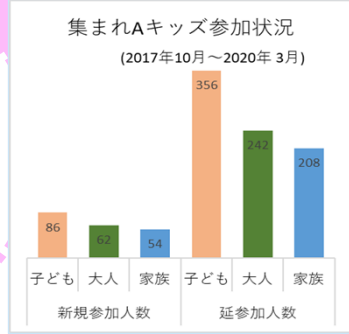


福井大学
 福井大学
 子どものこころの
 発達研究センター



集まれAキッズ
 親子遊び教室
 -毎月第4土曜
 9時半~10時半-
 発達相談11時半~
 《永平寺町》
 松岡保健センター・
 子育て支援課・福祉保健課・
 幼児園園長(交替)
 《福井大学》保育士・心理士

- 〈成果〉
- ・子育て支援課 保育士がリーダー
 - ・半構造化親子遊び「プログラム」検討
 - ・松岡保健センター・子育て支援課・福祉保健課の連携
 - ・幼児園園長参加による人材育成研修機能
 - ・「発達相談」拡充に伴う嘱託心理士予算増



地域医療・関連機関 など

子どものこころ診療部
 子どものこころ診療部

異世代ホームシェア事業の運営

事業責任者： 菊地 吉信（学術研究院工学系部門・准教授）

概要	
	異世代ホームシェアとは高齢者宅の空き室を学生が借り、家主である高齢者と学生とが共同生活を送る住まい方を指す。孤立防止と安心創出、住宅管理および住居費の負担軽減等、高齢者と学生の双方に様々なメリットが期待できる。これまでの研究と試行を通じ、事業の運営方法をほぼ確立することができた。今回申請では、これまでの活動を礎として、利用者の掘り起こしとマッチングの実現を目的として事業に取り組んだ。事業期間を通じて学内外での広報活動を積極的に行い、地域住民に事業について周知した。その結果、新規の家主希望者2件を獲得することができたが、学生の利用希望者とのマッチングを実現することはできなかった。また関係機関との協力関係を強化し、同様の事業を実践している京都府住宅課や他大学との情報共有をはかった。
関連キーワード	ホームシェア、高齢化、世代間交流、空き室・空き家、住環境

事業の背景および目的

高齢化と少人数世帯の増加は全国的傾向であり、高齢期の世帯とくに単独世帯にとっては、日常的な住宅の手入れや防犯など住み慣れた環境を維持するための身体的・精神的負担が自立した生活を続けるうえでネックとなるものと想定される。また住宅と世帯の関係をみると、住宅規模に対して世帯規模が小さく、ふだん使用しない空き室を抱えていることが窺われる。一方、一人暮らしの若者は生活費を節約する傾向にあるが、生活費のうち住居費の占める割合は依然として大きい。また不慣れた土地での一人暮らしに馴染めず孤立感にさいなまれるケースも生じている。以上のことから、異世代ホームシェアを導入することにより、家主と若者双方の孤立防止と安心創出、住宅管理および住居費の負担軽減等、双方にとって様々なメリットのある住まい方となることが期待できる。今回申請では、これまでの活動を礎として、利用者の掘り起こしとマッチングの実現を目的として事業に取り組んだ。

事業の内容および成果

本事業は福井県社会福祉協議会との共同で実施しており、平成30年度までに延べ5組のペアを実現している。今年度は事業をさらに発展させ、新規マッチングの実現とそのための広報活動、関係団体との連携に取り組んだ。

広報活動としては、福井大学文京キャンパス近くの公民館行事に学生スタッフが定期的に参加し、事業のPRに努めるとともに、地区民生児童委員との連絡関係を築き、利用希望者募集に協力していただいた。また福井県立大学、福井大学医学部において学生利用者募集のポスター掲出、福井新聞に家主募集の折り込みチラシ配布を行った。

結果として、新規の家主希望者2件を獲得することができた。2件とも所在地は文京キャンパスまで自転車で15分以下にある。一方、学生側も令和2年度新入生から問合せがあり、マッチング手前まで進んだものの実現しなかった。県外在住者のため直接面談できず、電話やメールによるやりとりで時間がかかってしまったことが原因と考えられる。次年度以降の改善点として事業に生かしたい。

関係団体との連携については、同様の事業を行っている京都府住宅課と情報交換を行い、京都の事業および利用者の状況を教えていただいた。また、他大学から異世代ホームシェアを始めたいという相談を受け、情報の提供と交換を行った。

以上のように、今後はいっそう積極的な広報活動を行うとともに、利用希望者との連絡を円滑に行い、着実にマッチングにつなげたいと考えている。

参考文献・添付資料および特記事項等

特になし

事業名称:異世代ホームシェア事業の運営

事業責任者: 菊地 吉信 (工学研究科・准教授)

背景と目的

異世代ホームシェアとは高齢者宅の空き室を学生が借り、家主である高齢者と学生とが共同生活を送る住まい方を指す。孤立防止と安心創出、住宅管理および住居費の負担軽減等、高齢者と学生の双方に様々なメリットが期待できる。前年までの試験的運営を通じて事業の運営方法をほぼ確立することができたと考え、今回申請ではこれまでの活動为基础として、さらなるマッチングの実現と事業の発展を目的とする。

主な成果

前年度までに延べ5組のマッチングを行っている。今年度は、新規マッチングは実現しなかったが家主希望者を2件得ることができた。広報活動として文京キャンパス近くの公民館行事に参加しPRするなどした。また松岡キャンパスや福井県立大学にも学生利用者募集のポスターを掲出した。さらに、同様の事業を行っている他地域の情報収集・情報交換を行った。今後はいっそう積極的なPRを行い、利用促進をはかる。

